

「ガサ入れだよ、ガサ入れ。強制捜査。万里兄ちゃんは、お前を逮捕しにきました」

カメラに向かってかざされた手錠が、蛍光灯の明かりで冷たく光る。

反対の手には警察手帳。刑事ドラマで何度も目にしたことがある。多分、本物だ。部屋に入るなり椅子にどっかり腰かけた男——私の兄、万里は口元にニヤニヤと笑みを浮かべて、舐めるような視線をモニター越しに送っている。

「壁からまんこ丸出しで飛び出てるの、普通にシュールだな」

「ちよっ、やだ！ 見ないでよ！」

「見られたくないなら開けろ」

画面を斬るように、長い指先が上下する。

「開くのは分かってんだよ。風営法は無視してても、消防法くらいは守ってるだろう？」

白い壁にかかったモニターに、にやけた顔が映る。この意地悪な表情はよく知っている。私をからかい、追い詰め、いじめて楽しむ時の笑顔だ。

今すぐここから逃げ出したい。けれど、目の前の穴に隙間なくはまっているせいで、自力では身体を引き抜くことができない。

せめてもの抵抗で足を閉じようとしたものの、モニターには下半身まで映っていないため、本当に動かせているのかは分からなかった。

そもそも、腰の下からの感覚が全くない。

この壁が、感覚遮断壁だからだ。

「お、お兄ちゃんって普通のサラリーマンでしょ!?　なんで警察手帳なんか持ってるの!？」

「あー、言っでなかったっけ?　転職したんだよ」

「急になれるわけじゃないじゃん!」

「知らねえの?　今年度から特別法が改正されて、武道経験者は警察学校に行かなくても即時に警察官として任用されるようになったんだよ」

もっとニュース見ろよな、と呆れたように眉を寄せる兄は、確かに中学高校と剣道部に所属していた。

県大会でそこその成績を残すくらいには強かったはずだけど――

お兄ちゃんの部活動にあまり興味がなかったから、ベスト4だか8だかも、結局何段なのかも怪しい。

当時ちょっとだけ反抗期だった私は、「胴着も袴も洗うのが面倒だなあ」とか「もつとモテそうな部活に入ればいいのに」なんてことしか考えていなかった。

無駄にサラサラな黒髪と整った顔立ちをしていて「塩顔イケメン」だなんてチャホヤされていたんだから、サッカーやテニスとか。背が高いからバスケットでも良かったと思う。

（こんなことになるなら、本当に本当に、違うスポーツをして欲しかった！）

冷や汗を垂らしながら、椅子の肘掛についた緊急脱出ボタンへ手を伸ばす。

これを押せば壁が左右に開き、感覚遮断は解除される。穴から抜け出して逃げればいいかもしれない——けれど、それは下半身が丸裸のまま、お兄ちゃんと対面するということだ。ダメだ、完全に詰んでいる。

「感覚遮断壁クリカフェ『壁から☆クリリン』ねえ……ここ、時給いくらなの？」

「歩合制だから、正確には分からないけど……時給だと、だいたい平均して……八千円、くらい……」

頭の中で必死に計算し、少し控えめな金額を答えると、兄はベージュのトレンチコートの肩を大げさにすくめ、「ボロい商売ですねぇ」とため息をつく。

「道理で最近金回りいいはずだ。鞆とか靴とかバンバン買ったもんなあ？」

「それは……サークルの合宿とかで必要だったからで……！」

「必要なら兄ちゃんに言えばいいだろ？」

「言っちゃって、お兄ちゃん『駅前のショッピングセンターで買え』とかケチなことしか言わないじゃん！　ダサいからイヤなんだけど！」

「高っけえブランド物ばかり欲しがるお前が悪い。学生なんだから、身の丈に合った物を持てよ。そもそもお前は昔からなあ——」

「あーあー、知らない知らない」

お兄ちゃんの説教は、長い上にしつこい。モニター越しに自宅のリビングでするような言い合いをしていると、「あのさあ」と整った顔がモニターにぐっと近づいてきた。

「もっと汗水垂らして働いた方がいいぞ？ 可愛い妹が壁からまんこ突き出して、見知らぬおっさん相手に荒稼ぎしてるなんてさあ——兄ちゃん悲しいよ。親父と母さんになんて説明したらいいんだ？」

「い、言わなきゃいいじゃん！ お兄ちゃんには関係ないでしょ！」

「関係大アリ。二人が海外赴任から帰ってくるまでは、兄ちゃんがお前の保護者なんだから」

頭をフル回転させる。なんとしてでもこの場を切り抜けなければ、私の人生はここで終了だ。家族に風俗店勤務が露見するということのもかなり絶望的な状況ではあるけれど、もしも本当に逮捕されたら……！

（ダメだ……っ！ 何にも言い訳が思いつかない……！）

同情と理解が得られそうな事情はないか。全く思いつかない。私は実家暮らしだし、奨学金を借りているわけでもないし、毎月のお小遣いもしっかり貰っている。世間的には十分恵まれている方だ。

でも、大学生活は何かとお金がかかる。万里お兄ちゃんから渡される金額じゃ全然足りない。

可愛いお洋服も着たいし、友達とテーマパークにも行きたい。推し活だって全力で楽しみたいのに、お兄ちゃんは財布の紐が硬すぎる。

追加支給をねだると「学生の本分は勉強なのに」とか「若いうちから贅沢を覚えると後々苦労する」とか、二十四歳男性とは思えないお説教が始まる。

だから良いバイトがないかを常に探してて、友達のマミちゃんにこの店を紹介されただけ——

「なるほどね。『遊ぶ金欲しさ』、と」

「ち、ち、ちがーうっ！」

「違くない。言い訳するならもうちよつとマトモなこと言えよな」

「うつ、ぐぐ……」

お兄ちゃんは再び手錠をカメラにかざして、見せつけるようにフリフリと振った。

「とりあえず、お前は現行犯逮捕な」

「えっ」

「店はもちろん営業停止。店長は売春防止法違反で七年以下の拘禁刑及び三十万円以下の罰金、とかかな。従業員は執行猶予つくだろうけど——まあ、とりあえず署の方で話を聞かせてくださいねー」

「ちょ、ちょっと待ってよ！ そんな、いきなり逮捕だなんて……！」

よく絶望的な状況に陥った時に「目の前が真っ暗になる」なんて言う。あれは嘘だ。

実際は逆。やけに視力が上がって、壁についている染みがくつきり見える。

世界の解像度が、急激に跳ね上がる。思考速度が限界突破することで、脳の近くにある視神経まで研ぎ澄まされているのかもしれない。

（まずいまずいまずい……ッ！）

逮捕って停学？　もしかすると退学？　実名報道……はさすがにされないはずだ。でも、大学の掲示板に処分通知が貼り出されるから、勘のいい人は結びつけて考えるだろう。

（「あの子、壁から☆クリリンで逮捕されたせいで停学（あるいは退学）らしいよ」なんて特定されたら、絶対笑い者にされる……！　ネットのおもちゃになっちゃう！）

「お願いお兄ちゃんっ！　今回だけは見逃してえっ！　お願い、何でもするからあ！　今すぐ、今この店辞めるからあ！　これから絶対絶対いい子になるからあっ！」

逮捕だけはなんとしてでも避けたい。私は壁に取り付けられたカメラに向かって両手を合わせた。

「どうかなあ？　お前の『いい子になる』は当てにならねえし」

「お兄ちゃんの言うこと、何でも、ぜんぶ聞くからあ……お願いします……許してよお……！」

半泣きで懇願する。なりふり構ってはいられない。「お前さあ……」画面の向こうのお兄ちゃんは、ふっと口角を上げた。

「まんこ丸出しで泣き叫ばれると、兄ちゃん性癖歪みそうなんだけど？」

「いつ、今、おっ……おまんこ関係ないでしょ!？」

「いやいや。あるだろう？　つか、『おまんこ』って何だよ。今更上品ぶんなんて。遊ぶ金欲しきで壁クリ突き出してるメス穴は、『おまんこ』じゃなくて『まんこ』です」

もう耐えられない。私は両手で顔を覆い隠した。

（ああああっ！ 『感覚遮断壁があるから、客に何をされても感触ゼロ！ 処女でも寝転がってるだけで余裕で稼げる！』なんて甘い言葉に飛びつかなきやよかった！ 普通のキャバクラかコンカフェで地道にバイトしておけば、こんなことにはならなかったのに……!）

悔やんだとしても手遅れだ。羞恥と後悔で悶絶していると、スピーカーからどこか含みのある声が聞こえてきた。

「まあ……見逃せないことも、ない」

「へ……？」

手を外し、顔を上げる。「ほん、とお……？」間拔けな声が唇からこぼれた。

「そ。兄ちゃんが『この店はいかがわしいサービスを提供していませんでした』って上に報告すれば済む話だからな」

「いかがわしいサービス……」

「分かってるけど、提供してるよな」

「して……ます……」

しまくっている。むしろ、それがメインの業務だ。

一応カフェという業態なので、ワンドリンク制ではあるものの、この店のメインは壁から飛び出ているクリトリスをいじることだ。

座席でのんびり飲食を楽しんでいる客はほとんどいない。たいてい残すか、帰り際に慌てて一気飲みしていくかの二択だ。

「だろうな。ドリンク紙コップで出してるし。」

「そ、そういうお店なんだから仕方ないでしょ……ッ!？」

「いや、珍しいよ? 『カフェです』って言い張るタイプはレア。だから悪質なんだよな。カフェやりたいならフードメニューくらい提供しろよ」

ストローをくわえてズズツとすすりながら、お兄ちゃんは他人事のようにぼやいた。ちらつと見えた色的に、中身は多分メロンソーダ。しゅわしゅわしてるし。お兄ちゃんは甘党だし。

「普通こういう場面で注文するならコーヒーじゃない？」と思ったけれど、指摘すると百倍になって返ってきそうだから、見て見ぬふりをすることに決めた。

「まあ、とりあえず普段どういうサービスをしてるのか確認させろよ」

「普段……？ え、えっと、まずお客さんが部屋に入ってきて……」

「あー、口頭の説明とかいいから。普通にここで再現してください」

「えっ!? 今から!？」

お兄ちゃんはこくりと頷く。

「兄ちゃんがサービスを受けながら、何とかして『ここは健全なカフェです』って理由を見つけてやるからさ。どういうことやるのか説明しろ」

「無理！ 無理だよそんなの！」

ブンブン首を振って拒否すると、お兄ちゃん是不機嫌そうにこちらを睨みつけた。

「はあ？ いつもおっさんに触らせてるんだからいいだろ？ 昔は一緒に風呂入ってたし。俺、お前のおむつ変えたことあるし」

「いつの話よ！ ぜ、ぜ、全然違うから！ そういう思い出と！」

この店の普段のサービスは、端的に言えばクリ責め——女の子の陰核をいじくり回すことだ。

クリトリスを指でつまんで引っ張られたり、爪の先でカリカリされたり、割れ目をくぱぁ♡と押し開かれたり——そういうことを家族となんて、できるわけがない。

（同じ食卓を囲んでごはんを食べて、食後はリビングのソファで一緒にテレビを観て、どちらが先にお風呂に入るかでくだらない口喧嘩をして……）

そこに、クリトリスを触った触られたの関係が生まれると、完全に話が変わってくる。

今まで通りの「普通の兄妹」では、きっといられなくなる。

「嫌なの？」

「嫌に……決まってるじゃん……」

意地悪だし、ケチだし、デリカシーないし、勝手にごはんを大盛りにしてくるし、私の化粧水を無断で使うし、ソファで寝落ちしてたらほっぺにキンキンに冷えたビールを押し付けて起こしてくるけれど——お兄ちゃんは私の大切な家族だ。

えっちなことなんてできない。したくない。

そう切々と訴えると、お兄ちゃんは「じゃあ逮捕だな」とあっけらかんと言いつつ放った。

「あーあー、父さんも母さんも悲しむだろうな。可愛い娘がこんなくだんねえことでしょっぴかれたら。仕事も忙しいのに、一時帰国しなきゃいけないようになるだろうなあ」

「……っ！」

「まあ、俺はいいよ？ 二人に会えるの嬉しいし。でも、できたら普通に『お帰りなさい』が言いたいよなあ？」

そして、お兄ちゃんはすっと笑みを引っ込めて真剣な目つきになった。

「俺だってさあ、可愛い妹を犯罪者にしたくないんだよ」

ジャラリと音を立てて手錠が揺れる。画面越しにバチッと視線が合わさり、お兄ちゃんが本気だと悟って、ごくんと唾を呑み込んだ。

「このまま逮捕されるのと、お兄ちゃんに助けてもらおうの。どっちがマシか、賢い頭でよく考えてみる」

何もしなかったら、逮捕からの退学で人生終了だろう。お父さんにもお母さんにも何もかもがバレてしまう。

（でも、恥ずかしいのをちょっとだけ我慢すれば、助かる道はあるかもしれない）

お兄ちゃんの目を見つめる。真剣な瞳。一回だけ見に行った剣道の試合で、こんな表情をしていた。かつこいい、のかもしれない。刑事っぽくはある。嘘をついているようには見えない。だったら――

「……わかった」

気持ちを落ち着かせようと、ぎゅっと目をつむる。大丈夫。いつだって、私のピンチを救ってくれるのはお兄ちゃんだ。

痴漢に遭った時も、同級生がストーカーっぽくなった時も、気がついたらお兄ちゃんが全部解決してくれていた。だから、今回もきっと大丈夫――！

「……っでも！ 絶対変なことしないでよね！」

「いや、もうこの状況がだいぶ変だけだな」

「そうだけどさあっ！ 普通に触ってね！ えっちな触り方したら、マジで怒るから！」

「はいはい。んじゃ、捜査入りまーす」

気の抜けた返事とともに、手錠が下ろされる。お兄ちゃんの手が画面から消えて、衣擦れの音がスピーカー越しに届いた瞬間、私の心臓がドクンと鳴った。

（来る……っ！）

思わずぎゅっと目をつむって、肘掛の先端を握りしめた。

上半身は、深く倒されたりクライニングチェアにもたれかかっている。おへその上から下腹あたりまでは壁の中で、下半身は向こう側。

お客さんが触りやすいように座面はない。婦人科の診察椅子に似ているな、というも思う。腰から下が仕切りで隠されているところも同じだ。

ここから先は、どんな風にクリトリスをいじられても、こちらからは全く見えない。何も感じない。

普段は「何されても見えないし感じないからラッキー♡」としか思っていないのに、今日の私はおかしい。頭の中で卑猥な妄想が膨らんで、顔が爆発しそうに熱くなる。

「今、膝触ってるけど……本当に感覚ねえの？」

耳をすますと、肌を撫でているようなさりさりした音がする。でも、触られている

感触はない。

「うん。全然わかんない」

「こっちは？ ふくらはぎのツボ押してるんだけど、痛いやつ」

「平気。押されてる感じもしないし」

当然痛くもない。お兄ちゃんは実験を楽しむように、下半身のあちこちを確かめているみたいだ。口角がどんどん上がっている。

「じゃあ、ここは？」

「だから、感覚ないんだってば。そもそもどこ触ってるのか、分かんないし」
「マジで？ 俺、めちゃくちゃ足の裏こちよこちよくすぐってるんだけど」

卑猥な場所じゃないけれど、想像すると妙に気恥ずかしい。シフトに入る前にシャワールームで綺麗に洗ったはずだけれど、急に心配になってくる。普段人に見せる場所じゃないし。まあ、私は足裏どころか下半身の全てを見せているけれど。

「あ、でも足の指ピクピク動いてる。へえ……反射はあるのかな」

ふむふむと感心したように頷き、「これ、仕組みどうなってるんだ？」と首を捻っている。人の身体で遊ばないで欲しいと内心で思いつつも、私は答えた。

「なんか、壁の部分が催眠的な素材になってて、脳を誤魔化してるんだって」

「はあ？　催眠？」

「うん」

最近流行しているでしょ、と話題に出すと兄は露骨に不快そうな顔になった。

「あれ、あんま好きじゃないんだよ。ヤバイ副作用とかありそうじゃね？」

「ない、と思うけど……人体に影響はないよって、入店の時に言われたし」

店長の説明は、専門用語が多くてよく分からなかった。要は、脳を誤魔化して下半身の感覚だけを上手くシャットアウトしているらしい。お兄ちゃんは、怪訝な表情のまま、私の身体のだこかを撫で回している。

まだ足の裏をくすぐっているんだろうか。それとも、もう少し上がって膝か、太ももか——その奥のしっとり柔らかない部分？

この壁がある限りは、刺激や快感が脳に伝わることなんてあり得ない。

そう頭で理解していても、首筋から背中にかけて嫌な汗がじわじわと伝っていく。

（お兄ちゃんは、今私のどこを触っているんだろう……）

不安を紛らわせるために指先をいじっていると、壁にとりつけられたスピーカーからお兄ちゃんの笑い声が降ってきた。

「そんなビビった顔すんなって。壁からまんこだけ出てんの、めっちゃくちゃ面白いからさ。もっと堂々としてろよ」

「っ……ちよつと！ そういうこと言わないでよっ！」

「いや、何か和ませようかなと思って。なんか、こういうホラー映画なかった？」

あれは垂直だったな、と勝手に納得されて眩暈がしてくる。両手で耳を塞いで目を閉じると「現実から逃げんなー」と窘められた。

どうしてこっち側の壁にもモニターがついているんだろう。絶対にいらぬ気がする。客の動きを監視するため？　でも、それなら上半身だけじゃなくて手元まで映さないという意味はないはずだ。

でも、今は見えなくてよかった。お兄ちゃんに下半身をまじまじと見られ、あらゆる場所を触られているところなんて、絶対に直視できない。

「お前、脚綺麗だからあんまいやらしくないんだよなあ。こういうアートですってギリ言い張れるレベルかも。白くて、すべすべで、かわいーじゃん」

「ほ、ほんと……？」

そう褒められてちよつと嬉しくなるなんて、我ながら単純だ。お兄ちゃんは嘘をつかない。ところが、お兄ちゃんはどうでもないことを言い出した。

「うん。パイパンだしな」

「は、はあ!？」

「これ、自分で剃ったの？」

「ちよっ！ それっ、それ、捜査に関係くない!？」

前言撤回。お兄ちゃんはもうちょっと嘘というか、わざわざ言わなくていいこともあると学んで欲しい。恥ずかしさのあまり、声が裏返ってしまう。

昨日丁寧にケアしたばかりだから、私のおまんこは産まれたままの赤ん坊みたいに無防備な状態だ。ピンク色の粘膜も、ぷっくりと小さく主張するクリトリスも、何も隠すものがない。

(一番恥ずかしいところ……っ♡♡ お兄ちゃんに見られてる……っ♡)

もしも足が自由だったら、きつと羞恥心から内腿をすり合わせて秘部を隠そうとしていただろう。だって、画面越しでも分かるくらい、お兄ちゃんの視線はねっとり粘っこい。こんな目で観察され続けたら、頭がおかしくなってしまうそうだ。

「関係あるんだよ。店長が剃ってたら、また別の罪も乗ってくるからな？ シェービング施術していいのって、理容師だけだから」

首を傾げる。「で、どうなの？」嘘をついても碌なことになんねえぞ、なんて脅しの言葉も付け足しながら。

「っ……うう、自分で、やったあ……」

「マジ？　なんで？」

「『その方がお客さんも喜ぶよ』って……お店の子に勧められてえ……っ」

「うっわ、ヘンタイの趣味……でもまあ、剃るの上手いじゃん。お前昔から工作とか得意だったし。手先器用だもんなあ」

そんなところ褒めないで欲しい。お願いだから見ないで、と懇願すると、お兄ちゃん は笑顔で首を振った。

「何がどうなってんのか確認しなきゃ、『これは合法です』って報告できねえだろ」

「そう、だけどお……やっぱり恥ずかしいじゃん……見られるの……」

「見ず知らずの男に見せるのは平気なくせに？ 女心難解すぎるな」

「お、にいちちゃんに、デリカシーが無さすぎるの！ こういうお店って、知り合いがお客さんにならないように、事前にカメラで確認とかするんだから！ 知ってる人と

えっちなことするのって、嫌だし恥ずかしいものなの！」

声を張り上げる。フッフッフと威嚇するように画面を睨むと、お兄ちゃんは大袈裟な仕草で両手を広げてみせた。

「お前の言い分はよくわかった」

向こうでガサゴソと体の位置を変え、モニターに兄の顔が大写しになる。

「しゃあねえから、顔見ててやるよ。優しいお兄様に感謝しろよ？」

「……っ、ありがとう……」

「はい、素直♡ お前、男転がすの上手いなあ。そういう、ツンツンした後しおら

しくするの、みんな大好きだからさあ。客ともこういう感じで会話してんの？ お前、めっちゃ指名取れるんじゃない？」

「どうだろ……あんま、お客さんと会話しないし……」

プレイ中の女の子との会話は、有料オプションだ。そのせいか、頼む人はほとんどいない。みんな無言で股間を弄り回し、無言で帰っていく。

こちらとしては、椅子に座っているだけでいいから楽なことこの上ないけれど、何が楽しいのかはさっぱりだ。

「男はさあ、みんな透明人間になりたいんだよ」

お兄ちゃんはしたり顔で語り出した。

「自分の存在を消した状態で、女の体を好き放題触りたい。「壁の向こうで平然としてる女のクリを、俺は今いじくり回してるんだぞ」って、優越感に浸りたい。だから、お前に話しかけねえんだよ。会話がしたけりや、別の風俗に行けばいいからな」

「お兄ちゃんも？」

ニヤリと意地悪く笑う。はぐらかされた。でも、お兄ちゃんの言葉はすとんと腑に落ちた。男の人は、みんな誰にもバレないイタズラがしたいのかもしれない。時間停止モノのAVとかが人気なのも、きっとそういうロマンを叶えてくれるからだ。

「客と会話もしねえってことは、触られてる間めちやくちや暇なんじゃね？」

「うん。だからいつもは動画とか見てる……」

「は？ 勤務中だろ」

この店は勤務中のスマホの使用が可能だ。むしろ推奨されている。全く反応がない方が客は興奮するから、だそうだ。イヤホンも無償で貸与してくれる。

「じゃあ何だ、客がせっせとまんこいじってる間、お前はのんきにスマホ見ながらくつろいでるわけ？ それで時給八千円？ 随分といいバイト見つけてきたな」

「で、でしょ!? サークルの友達に紹介してもらって——」

「褒めてねえから。つか、自分じゃ気づいてないんだろうけどさ」

お兄ちゃんはふっと意地悪そうに口角を上げると、とんでもない言葉を口にした。

「お前、さっきからずっとイッてるぞ？」

「え……？」

「クリ、ちよつと触っただけで即イキだし。潮もぴゅっ♡ぴゅっ♡てずっと吹いてるんだよなあ」

「っ……!? な、なに、言っ……」

ぴちやぴちやぴちやぴちや——会話に集中していたから、異常なまでの水音に気づくのが遅れた。

ぬちやぬちやっ♡ぬちやっ♡ぬちやぬちやぬちゅううっ♡♡♡♡ 熟しきった果

実に指を突き立てて、果肉を弄ぶような粘ついた音。

ぢゅぽ♡ぢゅぽ♡ぢゅぽぽっ♡ ぷしゃっ♡ぷしっ♡♡

ぬちっ♡ぬちっ♡ぬちやぬちや♡♡ぬちゅぬちゅぬちやぬちや♡♡♡♡

「あ、あ、なに、これ……なんの音お……っ!？」

「なになって、お前のまんこから出てきた潮と愛液を、兄ちゃんの指でくちゅくちゅ♡
くちゅくちゅ♡かき混ぜてる音に決まってるんだろ？」

「なんでっ、うそっうそっ、こんなになるわけないじゃん！ 壁があるんだから！」
「何言ってるんだ？ 感覚遮断されてるのは脳だけで、下半身は普通に手マンされてる
のと同じだから」

「あっ……えっ……」

「普段イヤホンしてスマホ見てるから、気づいてなかったんだろ。真面目に働いてな
いからこうなるんだよ」

ほら、見ろよ。

画面いっぱいにお兄ちゃんの手元が映される。

ぬらぬらと淫らに光る、長くて太い指先。人差し指と中指の隙間から、とろりとし

た液体がなめらかな橋を架けて、手首に向かって伝い落ちるように艶やかな細い線を引いている。

「爪の間までびしょびしょだし、コートの袖も濡れちゃった。兄ちゃんのぶっとい指、根元まで余裕で飲み込んでたぞ。なーにが『感覚遮断壁があるから何にも感じない』だよ。駄々こねてるみたいに脚バタバタさせてイキまくりじゃん」

「うそ……っ、やだ、やだあぁっ！私、そんな……っ！」

「あのなあ、お巡りさんが嘘つく訳ないだろ」

あ、またこのドS顔。嫌な予感にぞくつと背筋が凍りついた時には、もう遅かった。

「……ま、何が起きてるか分からねえのは不安だよな。それじゃあ、お前のまんこが

どうなってんのか、兄ちゃんが丁寧に教えてやる」

「え、え、いいよ……知らない！ やだ！」

「まあまあ、遠慮するなって」

お兄ちゃんは、自分の指に舌を這わせた。ねっとり、私の蜜が舐め取られる。思わず目を逸らすと、笑い声と共に淫らな実況が始まった。

「まずはあ、パイパンまんこの割れ目を、すーっとなぞりまあす……♡ びらびらが邪魔だから、人差し指と薬指でぐちゅう♡って開いてえ……♡ おにいさん指で、上から下にすうー……♡ 下から上にすうー……♡ あはは、散々イカされた後だと、これだけで気持ち良さそう。トロマンびくびくしちゃうなあ♡」

「ひっ……！ や、やだあっ！ 言わないでよおっ！」

「言わなきゃ分かんねえだろ？ 兄ちゃんのご好意に甘えろって♡ 次はあ、おしつこの穴の上で、ぱんっぱんに腫れ上がったデカクリ♡ どんだけ弄られたら、こんなスケベな形になるんだよ？ このエロクリをつまんでえ……すーりすーり♡ ぐーにぐーにっ♡」

「やめてよおっ！ ばかばか！」

「あは、ほらほら♡ ぴゅっ、ぴゅっ、ぴゆるるるっ♡♡って、まーた潮吹いた♡ もう兄ちゃんの指先くらいデカいし、シコシコされていくし、ちんぽ予備軍だなあ♡」
「うそっ……うそだあっ！ デタラメ言わないでっ！」

「あのなあ、現実を直視しろよ。お前のまんこはあ、金出して女のクリトリスいじりにくる変態たちに開発されまくった淫乱まんこなの♡ びらびらもクリもデカくて、真っ赤に腫らして、ずっとイキっぱなし♡ 男をムラムラさせるために存在するエロ穴なの♡」

嘘だ。お兄ちゃんは嘘つきだ。自分の身体のことだから、私が一番よく知っている。毎日お風呂で洗う時に触れるけど、以前と変わらない、普通のおまんこだ。他の女の子のそれを見たことはないけれど。

（そりゃあ、週に何回かこういうバイトをしているから、少しくらい柔らかくなった
り感度が上がったりはしてるかもしれないけどっ！ オナニーの回数もちよっと増
えたけど！ ちんぽみたいなんて言われるほど大きくなってない！ はず、だよ、ね
……？）

嘘だと言いたい。でも、お兄ちゃんの言葉のせいで、頭の奥がむずむずしてく
る。「本当は大きくなってたらどうしよう」なんて想像が止まらない。恐ろしい妄想を
打ち消すために、私は頭をブンブンと激しく振った。

「は〜い♡ 指ズブッ♡って入れた瞬間に、まんこ締まった♡ 『おにいちちゃんのお指だあいすき♡ もっと奥まで来て来てえ〜♡』って甘えんぼしてる♡ お前、まんこだけは素直で可愛いなあ。クリはデカすぎるワガママちゃんぽなのにさ」

「お、おつきくないもん！ 普通だもん！」

「いや、デカいつて。ここまでデカクリなの、ちよつと危機感持った方がいいぞ？ 彼氏できたらドン引きされるからな？ 兄ちゃんだって、ちよつとショックだし」

「お、男の人はクリ大きいと喜ぶって……み、みんな言ってるもん……っ！」

「みんなって誰だよ。ああ？」

「ま、ま、マミちゃん……」

「誰だよそいつ」

チツと不機嫌そうに舌打ちをしたかと思うと、手の動きが速くなった。画面の中、

リズムカルに肩が上下している。

単調なピストンだけじゃない。何かを塗りたくるような、ぬちゅぬちゅ♡という粘ついた音。指先で水面を叩くかのような、ちゃぱちゃぱ♡した音。

ぢゅぶぢゅぶ♡♡ぬちやぬちや♡♡ぢゅぶ♡♡ぬちや♡♡じゅぶじゅぶ♡♡
ぷッ♡♡♡

音割れしそうな水音が個室に響く。どれだけ激しくかき混ぜたら、こんな音が出るんだろう。

「変な知恵つけてんじゃねえよ、バカ」

「きやううつ……っ♡♡」

「男はさあ、自分の手で一からクリ育てたデカクリが好きなんだよ。『風俗で働いてえ、お客さんにシコられまくってえ、アクメ狂いの淫乱ちんぽクリになっちゃいま

したあ♡』って言われて、喜ぶヤツなんている訳ねえだろ」

画面の隅、足先がぴょん、ぴょんと飛び跳ねるように見え隠れしていることに気づく。あの位置に足先が映るなんて、相当高く跳ね上げないと、カメラの画角的にあり得ない。

お兄ちゃんの言う通りだ。私のおまんこは、お兄ちゃんの指に弄ばれて、何度も、何度も、無様に絶頂を繰り返している。

「なあ、今指何本入ってると思う？」

「え、え、二本って……さっき言ってた、よね……？」

「ブッブー、正解は三本でしたあ♡ さすがに四本目は、人体への挑戦になるからやめてやるけど、三本なら全然ヨウだな♡」

くらくらしてきた。あの関節のゴツゴツした太い指が、三本も私のナカに入っている？ お兄ちゃんの手なら、目を閉じていたって想像できる。できてしまう。「もっとしっかり食えよ」と大盛りのご飯が入った茶碗を差し出してくる、見慣れた手元。大学に合格した時に「やったな」と頭を撫でてくれた、あの手のひら。少しかさついた肌の感触だって知っている。今は、感じることをできないけれど。

あの手が、あの指が。

「お前のまんこ、熱くてドロドロで……やわらけえ♡　ぐちよぐちよ♡　ぬちよぬちよ♡……指をかるく曲げてえ、腹側のエロいところ、ぐい♡って圧迫するとさあ……はい、ぷし♡♡　潮吹きまんこの一丁上がり♡♡」

「あ……あ、あ……っ……」

「フツッさ、こんなに連続で潮吹きアクメしてたら『もう堪忍してください♡』っ

て泣き叫ぶはずなんだよ。イッたあとして、男も女も敏感になるじゃん？ でも、この壁のおかげで、お前は休憩不要でイキ放題♡ ほんっと、感覚遮断されててよかったなあ♡」

「やだ、やだあつ！ おまんこいじめないでよおっ！」

「おい、感覚遮断屋さんなんだから、客の言葉にピイピイ言うなよ。いつも通りイヤホン付けて、スマホ見とけ？ あ、またイッた♡ いく時に足の指丸めるの、なんか弱っちいな♡♡ お前さあ、もう風が吹いただけでイけるんじゃないねえの♡」

警察官はサディストが多いって聞いたことがあるけれど、お兄ちゃんがその証明だ。人をいたぶるのが楽しくてたまらないといったサディスティックな声と、じゅぷじゅぷ♡ぬちゅぬちゅ♡という卑猥な水音が、狭い部屋に充満していく。

相変わらず、感触は全くこちら側には届いていない。それなのに、なんだか頭の中

がぐずぐずに溶けていくような錯覚を覚える。

（いま、絶対、おまんこ変になってる……♡）

無骨な指が秘所をかき回し、肉壁をくすぐり、敏感な突起を責め立てる。

真っ赤に腫れたクリトリスは、お兄ちゃんの指から必死に逃げようとしているはずだ。でも逃がしてもらえない。長い指に捕まって、イッてもイッてもぐりぐり押し潰されている。割れ目には、無遠慮にずぼずぼ♡と指が突っ込まれているだろう。

（あ、だめ、想像しちゃう……♡♡）

脳が届かない快感を勝手に再現し始める。処女だけど、絶頂する感覚はオナニーで

知っている。今この瞬間に私の下半身を襲っているのは、寝具の中でコソコソとする秘め事の何倍、何十倍も激しいに違いないけれど。

（限界……っ、もう無理……っ！　こんなの、頭がおかしくなっちゃう……っ！）

このままだと耳から入ってくる情報だけで達してしまいそうだ。
脳が誤作動を起こして、お兄ちゃんの声だけでイカされちゃう。

「も、もういいでしょ……終わり！　時間切れ！」

本能的な恐怖に耐えきれなくなり、必死の思いで声を張り上げた。お兄ちゃんは眉を顰めた。

「ああ？ まだ制限時間内だろ」

「そうだけど！ でも、最後にお楽しみがあるの！ それがこの店のメインなんだから！ そっちのモニターの横にボタンあるでしょ！」

「ボタン——このダサイテープのやつ？」

悪趣味なショッキングピンクをした丸いボタンの下には、「感覚遮断強制終了」と印字された黄色いラベルが貼られている。店員呼び出しベルと紛らわしいと不評だったせいで、後から雑に追加されたらしい。

けれど、このボタンはフェイクだ。

押されても、感覚が戻ってくることはない。

この仕事で唯一負担があるとすれば、偽のボタンを押された瞬間に、今までの快感が一気に押し寄せたかのような盛大ないきつぷりを演じることだろう。

「あゝ♡ いっちゃうゝ♡」なんて汚い声を出しながら、椅子の背もたれにバンバン頭をぶつけて髪を振り乱す。白目を剥くとなお良し。

最初は死ぬほど恥ずかしかったけど、慣れてしまえばこっちのもの。思いつきり叫んで暴れるのは、日頃のストレス解消にもなるし。

「これ、押して大丈夫なのか？　今までの快感がまとめてくるんだろ？　お前、おかしくなるんじゃないかね？」

「いいから！　いつもやってるから！　大丈夫だから！　早く押して！」

「お前がいいならいいけどよ……」

かちつ、と無機質な音が鳴った。演技のコツは、音が聞こえた瞬間に即座に反応しないこと。

一瞬だけ間を置いて、首をビクッと動かし、大きく目を見開く。私は「何が起こったのか全然分からない」という、きよんとした顔を作った。ここからが本番だ。

「あ、あゝゝん♡いくゝっ♡いくゝっ♡きもちいのが、一気にきちゃうゝゝ♡」

喉の奥から絞り出すような悲鳴とともに、背中を大きくのけぞらせる。両目をぎゅっと固く閉じて、全身をガタガタと激しく痙攣させる。

長時間、一方的に責められ続けていたのだ。演技は大袈裟すぎるほどでいい。気絶するほどの絶頂を全身で表現するために、私はいつも以上に大暴れしてみた。

「ハア……ハア……っ！ あ、あー……びっくりしたーっ！」

「……」

「はい、おしまいっ！ 感覚遮断が切れたから、サービスは終了ですっ！」

尊厳とか恥じらいとか、多くのものを失った気がするけれど、逮捕されるよりはずっとマシだ。これで恥ずかしいのはおしまい。そう期待して、チラリとモニターを盗み見る。

「あのなあ……」

お兄ちゃんは、息を整える私を見ながら、ニヤニヤ笑いを浮かべていた。

「お前……ほんっと演技下手だな……」

「ち、ちがつ……！！ ちがうもん！ 本当にイッたし！」

「へえ？ 兄ちゃんが押したのこれだけど？」

お兄ちゃんはカメラに向かって、小さな懐中電灯を見せつけた。

カチッ。ライトが消える。

カチッ。また点灯する。

「っ……！！！！」

「イクふり、わざとらしすぎ。これに騙される奴いんの？」

「う、う、ううう嘘つきいゝつつ！！！！ バカ！ バカバカ！」

「嘘つきはどっちだよ。なあ？」

モニター越しの視線はどこまでも冷やかだ。

絶望で青ざめる私を見つめながら、お兄ちゃんは今静かに――心の底から楽しそうに
言い放った。

「あーあ。お巡りさん騙そうとする容疑者には、お仕置が必要だなあ？」